

欲望する主婦たち あるいは 抑圧される子供たち

多和田葉子『犬婿入り』をめぐって

疋田 雅昭

物語は、動きも音もほぼなくなった公団住宅の昼下がりの様子を執拗に描くところから始まる。

昼さがりの光が縦横に並ぶ洗濯物にまっしろく張りついで、公団住宅の風のない七月の息苦しい湿気の中をたっただひとり歩いてきた年寄りも、道の真ん中でふいに立ち止まり、斜め後ろを振り返ったその姿勢のまま動かなくなり、それに続いて団地の敷地を走り抜けようとしていた煉瓦色の車も力果てたように郵便ポストの隣に止まり、中から人が降りてくるわけでもなく、死にかけた蝉の声か、給食センターの機械の音か、遠くから低いうなりが聞こえてくる他は静まりかっえた午後二時。
(79頁)

原稿用紙で換算すると実に半分以上の長さである。続く、団地で見るともなくテレビをつけている女や、無人の台所などの描写が六百字前後、その後のキタムラ塾の貼り紙への焦点化は、実に四百字以上の長さである。この貼り紙も、まるで先の「洗濯物」と呼応する様に「剥がれずにしぶとくしがみついて」いる。貼り紙へ言及する文章の後半部は以下の様である。

あまり汚いので触るのが嫌なのか、わざわざ剥がそうとする人もなく、なにしろこの団地では団地文化が始まって三十年の間に、自分の家の中は毎日きちんと片付けても外の通りに捨てられていた気味の悪い物には触わらない伝統が定着し、道の真ん中に車にひ

かれた鳩がつぶれていても、酔っぱらいのウンチが落ちていても、それを片付けるのは市役所の仕事と決めつけていて、この貼り紙にしても、そのうちボロキレのようになって空中分解してしまうまで触ってみようという人はいないだろうというほどの無関心ぶり。
(80頁)

一見すると多くの情報が述べられているにもかかわらず、その最後が名詞に集約されるこの語りの在り方は、結局はひとつの情報しか伝えていないとも言える。先に引用した二カ所でも、結局はある公団住宅の「静かさ」と、その住民達の汚れに対しての「無関心ぶり」である。もちろんプロットに関しては全くなにも寄与することのないこの語りの部分は、ナラトロジーの視点からすれば、持続度ゼロの状態である。にもかかわらず、これらの描写は実に饒舌であり多様な視点や「三十年の間」という時間的スパンを内包している。

さらに、この語りは、「北村先生」や他の主婦達や子供達などに自由に内的焦点化しており、特定のジェンダーを指摘する指標もない。つまり、特定の特徴を付与できないようになっていのである。岡部隆志は、この語りに「わきでる」という様態を指摘した上で、以下の様に述べている。⁽¹⁾

民話とは、その本質において個人ではなく人々(社会)の無意識の顕現である。民話的手法をとることに於いて、少なくとも、言語表

現の担い手としての個人を隠すことができる。そうすることで作品から、作者そのものを消去し、何処かから「わきでる」物語として装うとしたことである。

この重要な指摘の背景には、以下の多和田葉子の自作解説がある。多和田は、偶然、ハンブルグの図書館で福田晃の「犬婿入りの伝承」という論文に出会うことからこの話形に興味を持ち、それがモーケン族や中国、インドネシア、沖縄諸島など「アジアの色々な地域にいるような形で広がっていること」に魅力を感じたという。

わたしは、自分の心につたえかける要素だけを全部集めて、わたしだけのバリエーションを作った。それが、去年ある小説を書いている途中、突然いきいきと記憶に甦り、ついにその小説を裏から支配して、「犬婿入り」という小説にしまった。

「「犬婿入り」について」⁽²⁾

「突然いきいきと記憶に甦り」という箇所から、この小説に作者自身の無意識の関与を重視するのが、岡部論のモチーフであろうと思われる。確かに、多和田は「民話的手法」により、作家としての「個人」を消去することに成功したという指摘は頷けるものである。そう考えれば、ある話形を共有する民話の幾つかのバリエーションの結節点として、この『犬婿入り』という物語も機能していると言える。

だが、ここで看過してはならないのは、近代小説という形式で発表されているこの物語は、以下に様々な民話を下敷きにされようと、そこに付された「多和田葉子」という固有名を消せないことである。これは、作家論的な関心を排すことが出来ないという意味ではない。多和田の「心につたえかける要素だけを全部集め」た多和田「だけのバリエーション」であるこの結節点で、他でもないこのバリエーション

を生み出す社会とは何であったのだろうか。私の関心はむしろそこにある。

1

この物語の舞台となる町は、以下の様に語られている。

そもそもこの町には北区と南区のふたつの地区があって、北区は駅を中心に鉄道沿いに発達した新興住宅地、南区は多摩川沿いの古くから栄えていた地域で、今では同じ多摩に住んでも南区の存在すら知らない人が多いけれども、北区に人が住み始めたのはせいぜい公団住宅ができてからのこと、つまりほんの三十年ばかり前のことで、それに比べて多摩川沿いには、古いことを言えば、竪穴式住宅の跡もあり、つまりそのような想像も及ばない大昔から人が暮らしていたわけで、稲作の伝統も古く、カドミウム米の出た六〇年代までは堂々と米を作っていたし、また 日本橋から八里 と刻まれた道標の立っているあたりは、小さな宿場町として栄えたこともある。

(89頁)

民話とは通常は、その地域性を喚起できないようにするのが普通であるが、この物語はその地域が限定出来るような指標に溢れている。日本橋から八里 ある古くからある宿場町で、多摩川を有し、六〇年代に「カドミウム米」で話題になって米作がなくなったという。「日本橋」から多摩川方面に延びる国道は、旧甲州街道、その「八里」の「道標」は「府中宿」、現在の府中市に相当する地域である。ここは、内藤新宿からも六里余りという好位置にあり、本陣、脇本陣、問屋、旅籠屋、木賃宿、飯盛旅籠の揃った宿場であった。また、近隣の村々の人々が買出しや行楽に出かける盛り場としてもにぎわった。

一九六〇年代後半は、日本列島各地で公害の問題が大きくクローズアップされていた時であったが、一九七〇年の二月二二日に多摩川支流の平井川から北大久野川（日の出村）で八ヤなどが二〇〇〇匹が浮き上がり、さらに五月三日に多摩川（秋多町）でフナなど三〇〇〇匹が浮きあがった。東京都は七月より多摩川で自然調査を開始し、八月一五日には都公害規制部青梅市と羽村町にまたがる西東京工業団地のシアン廃液放流（多摩川）の実情調査を行う。その結果、府中市日新町付近の水田地帯と用水の土壌からカドミウムが検出されたのが一月一三日、四日後さらに上流の府中用水からカドミウム検出のため府中用水の水路調査が実施され、この地のカドミウム汚染は全国的に知られるところとなった。

空襲を免れた古い家も多く、そんな南区に団地の子供たちが出かけて行くのは、以前は写生大会とカエルの観察の時くらいだったが、キタムラ塾ができてからは、子供たちは塾へ行く日が来ると、まるで団地の群れから逃ようとでもするように、せかせかと多摩川の方向へ向かい、広い自動車道路を渡って、神社の境内の隣を通って、梅園をこっそりくぐりぬけて近道し、北村みつこの家の垣根の壊れたところをくぐりぬけて、庭に飛び込んで行くわけだったけれども、……（一文が非常に長い小説の為、以下……は省略を示すこととする） 論者註）（89～90頁）

こうした時期に、京王線沿いの新興開発地として発展し始めたのが「北区」なのである。現実的には北区と南区の境界は必ずしも「多摩川」がそれをなしていたわけではなかったが、この物語では、ある種の「境界」として機能している。川、神社、こっそりくぐりぬける「近道」、玄関ではなく壊れた垣根と、子供たちの通学路は、まさに「境

界」としての象徴に満ちている。

そして、物語におけるこの北区と南区の関係は、非対称なそれであることも確認しておかねばなるまい。北区の人々が南区に赴くことがあっても、決して逆方向の移動は描かれていない。少なくとも物語の南区は、北村みつこ以外の人物にとって、常に彼岸であり帰ってくる場所ではない。現実にも、駅を中心に全ての生活条件が整っていた新興住宅街の人々にとって、特別な理由もなく、川向ここの旧宿場街に赴く必要などなかったであろう。

新興住宅地の子供達が南区へ通う唯一の理由は、北村の家が「塾」であることである。塾産業は、高度経済成長期以降バブル崩壊まで、学力競争の背景もあり、最も発展した職種の一つである。子供が多い新興住宅地や団地は、最もその需要が多い場所でもある。しかしながら、塾とは、同じ教育機関でありながら、学校といった公の場所ではない。学校が、子供達にとってその能力を決定付けられる公の領域としてあるならば、特に「キタムラ塾」の様な個人塾とは各子供達が密かに能力を補う私的な領域である。その意味で「塾」とは、都市の子供達にとって、学校と家庭という日常の狭間にある最もなじみ深い非日常の空間なのである。

こうして考えてみると、この物語は、「キタムラ塾」を舞台とした縄文時代以来の伝統を有する南区が生み出す豊饒な物語の断片を、カドミウムの騒動依頼、入れ代わる様に発展してきた、新興団地が象徴する北区に新たに住みつき始めた人々が、解釈し再構築する物語であると言える。つまり、具体的な土地を喚起する指標に溢れながらも、物語は、戦後の日本社会の多くの地域に見られた事態を示している。物語に刻印されているのは、具体的な場所ではなく、戦後の日本社会の時代様相なのである。

伝統社会から新興社会へ、この物語を媒介する存在が子供達である。

大抵の母親は、妙な噂などはあまり気にしないようにし、時には、あんな塾に子供をやるわけには行かないと言い出す母親がいても、(中略)そう簡単に信用しない方がいい、子供は、エッチなことと汚いこと の区別がつかないから、両者をごちゃ混ぜにしてしまつことが多いのだから、などとなだめる母親もいた。(80頁)

子供達は、南区と北区を自由に動き来出来る存在である。母親たちは、南区の情報を子供達の断片的なそれをもとに再構成するしかない。印象深くかつ僅かな情報しか保持し得ない子供たちの言説は、にもかかわらず、大人達の唯一の情報ソースである。だが、ここで我々が看過してはならないのは、子供達が持ち帰るのは主として汚いことに関する情報であり、大人達が欲しい情報こそが、美しいみつこに関する エッチなこと つまりは性にまつわるものなのである。

誰でも確実に知っていたのは、北村みつこが三十九歳だという事実で、子供たちは女の先生に年齢を尋ねて困らせると面白いということを知っていたし、また、先生の年齢をつまぐ探り当てて母親に報告すれば、母親が必ず興味を示すことも知っていたので……(87頁)

母親達の感心は、この女性の教育者としての資質にあることは当然であるが、むしろそれ以上に、「三十九歳」である独身女性の暮らしやこれまでの人生なのである。一方で南区の近所の住民達も、当初は突然現れ住みついた女性の素性に関する興味がなかった訳ではない。

しかも子供のいない女性の場合、どう分類していいのか分からない三十九歳という中途半端な年齢のせいもあって、噂するのにも疲れてしまい、放任するようになったのを見ても分かるように、近所の人たちは噂にかけては、団地の主婦たちほど根気がなかった。(89頁)

だが、南区の人々にとって常に目の前にある北村の実存は、その探求を継続させはしない。むしろ、「噂」から想像し、物語を創造し続けることが出来るのは、常に断片的な情報が与えられる彼岸の住民たちだけなのである。情報の断片性が、逆に決して完成することのない対象への欲求を生み出すのである。

ソフトクリームを舐める時にも自分が黒い犬になったつもりになって時々犬の鳴き声など真似しながらペロリペロリと舐め、時には宿題をやりながら自分自身の手のひらをペロリペロリと舐めていることもあるので、母親たちは気持ちが悪くなり、やっぱりキタムラ塾に子供をやるのはやめようか、このままでは子供が大変なことになってしまつのではないかなどと思っている、でもあの昔話、実際にあるんですつてよと、カルチャーセンターで民話研究の講座を取っている母親が言い出し、民話の本にも載っていたと言い張るので、それを聞いていた母親たちはなんだか安心して……(85～86頁)

こういつた理解の枠組みを持つ北区の人々は、「地元の多摩や下町や山の手出身の母親だけではなく、関西や東北などから来た母親たち」である。つまり、お互いに「家」を介した長い伝統を共有した関係ではない。

圧倒的なマジョリティーの中においては、一方的に見られる対象は常に新興のマイノリティーの側にあった。だが、これまでのマジョリ

ティの社会が衰退し、新たな社会がそのマジョリティ性を脅かしつつある時、逆に視線の対象になるのは、旧社会の伝統の痕跡である。民俗学とは、そういった近代的な眼差しであり、それが制度化した現代とは、あらゆる情報がレファレンス化された型にはめられることで理解される社会である。民俗学や文化人類学が持ち得たかもしれない対象から見つめ返されるという契機は、もはやそこにはあり得ない。あるのは、常に参照されるべき枠組みを提供し人々を安心させる字としての權威である。母親たちの安心の背景には、そんな近代ならぬ現代的な眼差しがあるのである。

3

それにしても、確かにこの物語は、エッチなことと汚いことに満ちている。物語の冒頭が、全ての動作が止まった静寂の夏の午後から始まっていることは、先の岡部隆志の指摘の様に、この物語人々の集合的無意識が構築した民話的なものであることを裏付けている。であるならば、フロイトを引用するまでもなく、それがエッチなことと汚いことに満ちていることは容易に説明され得るであろう。物語において塾に通う子供達の具体的な年齢ははっきりしないが、当然のことながら、肛門を舐めるなどといった大挿入りの民話との関連で、物語の子供達を「肛門期」のそれと結びつけるのは正しくない。北村の乳房を見た時の男の子たちの拒否反応などからは、おそらく小学生程度の子供達が対象となっている塾だと思われるからだ。この時期の児童は、心理学的には「男根期」から「潜在期」にあたる。「男根期」＝ディプスコンプレックスの時期を通過した児童は、小学校に入ってから、社会のルール（禁止、命令、義務）の中での生活が始まる。それによって、本能的な欲求を抑制し、そしてそれを潜在化

しなければいけない時期が「潜在期」である。

男の子たちがそれを見ると、喜ぶどころか、また垣根の向こうへ逃げてしまったのは、変と言えば変だったけれども、なにしろ男の子たちは女の子たちが嫌がったり恐がったりしてきやあきやあ言えれば自分たちの方は勢いが出るけれども、女の子たちがあんなことをしているのを見ると、逆にどこか不安になり、しかも先生にあんなに大きな乳房があるというのも、なんだか裏切られたような気がして悲しくなり、垣根の向こうでしおれていると、…… (92頁)

エッチなこと に関する対照的な性別の在り方が分かれており、さらに扶希子という新人塾生に、鼻くそをこすりつけるという汚いことをするのは男の子たちであり、女の子たちは彼女を無視するだけで、積極的には関わろうとはしない。基本的に子供達の行動規範は、属するジェンダーにより一様に規定されていると言つてよい。

その過程において抑圧されるのが、まさに エッチなこと と汚いこと に対する直截な表象であり、逆に言えば、この時期の子供達のそれらへの異常な執着は、その抑圧の反作用であるとも言えるのである。

4

八月という塾も夏休みに入った時期に、物語は大きく変化する。太郎と名乗る人物が突然北村宅に住み着き始めたのだ。「電報、届きましたか」と尋ねる太郎は、首を左右に振る北村を気にもせず、勝手に上がり込んでしまう。「電報」とは事前に情報を伝えるべきものであるはずだが、みつこが経験することになる太郎との生活は、なんらかの予兆があったわけではない。

だが、太郎の妻である良子が、みつこに「電報」について同じ質問をしていることから、太郎との関係の前には、この届くことのない「電報」が介在しているようだ。良子にせよ、みつこにせよ、関係が続かなかったことと「電報」の間の直截的な関係はわからない。しかし、届かない「電報」は、新たな関係を発生させ、最後に折田夫妻に届いた「電報」は、その関係を打ち切ってしまう。考えてみれば、文字でコンスタタイプに永遠を保証することは不可能性がつきまわってしまい、むしろパフォーマタイプに終焉を宣言することのみが「文字」に許された可能性であるのかもしれない。

以後、物語は、主として二人の生活に焦点化してゆく。夕方になり、夜に行動し、肛門を舐め、舌で食器を舐めつくし、汗をかかず、堅い毛はいつもと化したようにきちんとして、その下の皮膚は牛皮のように強くなめらかである。そして何よりも臭いに執着するといった太郎の特徴は、「犬婿入り」というタイトルや、物語でみつこが語る民話との関連で犬のそれを容易に連想させる。何となく抵抗出来ないまま太郎の生活のペースに巻き込まれてゆくみつこであったが、その生活が二人の間で完結するものであれば、それは民話となることはない。

ここでも、二人の生活を民話「物語」とするのは、子供たちの証言と大人たちの噂である。

数日後に、同じ子供が、夕方、プールの帰りに、北村みつこの家の前を通ると、同じ男が庭で、草取りをしているのを見たと言つた。これはおかしいということになり、塾も夏休みだと言つた。団地では北村みつこの名前が頻繁にささやかれ、草取りと言つ言葉さえ独特のニュアンスでささやかれ、だからと言ってこの言葉の指し示すことがはっきり分かっていた人がいるわけではなく、……

(102頁)

掃除だけではなく、庭の草取り、までこなす若い男の存在が、団地の主婦たちの様々な想像をかき立ててゆく。その想像はそれぞれの創造として異なったものとなって、草取りというコミュニケーションは、その豊饒な物語を全て包摂し、人々に広まってゆく。近所では男ができた、という噂が広がるが、団地の母親たちはその種の表現を「下品」であるとして排斥する。ある子供などは、太郎がクローバーの花でみつこの肛門をくすぐるうとして、いわば性的な連想に繋がる現場を見てしまっているわけだが、それが子供たちによって正確に再現されることはないだろうし、団地におけるコミュニケーションでは、それが変形を伴わず伝達されることもない。

誰もが一度はその男性を自分の目で見たいと思っていたが、塾もお休みだし、母親たちには南区へ行く理由などないので、子供をプールに行かせて帰りに北村先生にご挨拶していらっしやいと、このお菓子をお土産に渡して来てちょうだい、と言つのだが、無邪気そうにしている子供たちも、実は太郎を見に行くのが楽しみで、太郎を見ると、何か見てはいけぬものを見てしまった時のように、心が躍り……

(104～105頁)

つまり、ある社会のルール(禁止、命令、義務)が、逆にもその情報の内容を急速に変形させてゆく様こそが、現代の民話なのかもしれない。表現することが禁忌に関連するにもかかわらず、北区の人々は物語を欲し続けるのである。いや、逆に禁忌であるからこそ、

太郎の臭いに対する執着は、みつこ自身の臭いに関する感覚を鋭敏にしてゆく。

二オイが自分の気持ちと微妙に結び付いていて、たとえば、驚いた時にはそれらしい二オイが自分のからだから漂ってくることも分かってきて、驚いている時の二オイがすると、ああ、自分は今、驚いているんだなあ、などと自分の二オイを嗅ぎながら考えるようになった。

(106頁)

みつこは、自身の感情を嗅覚によって「客観的」に感じられるようになっていったのだが、これは、後に子供たちの母親が訪ねて来た時に決定的になる。母親たちの様々な生活臭によって「頭の中をかき乱され」たみつこは、不安に陥る。

特に、自分自身の肌をつつすらと覆つ汗の二オイが嗅ぎ分けられなくなつたために、みつこは自分の気持ちに自身が持てなくなり、自分は今、この人たちが押しかけてきたことを不愉快に思っているに違いないと思いがち、それを裏付ける二オイがないので実感が湧かず、そのため、余計うつろたえていた。

(108頁)

真に信用できる情報が、視覚や客観的な状況判断ではなく、嗅覚によるものになっているのである。嗅覚も視覚情報と同じ様に差異によるものだとしても、より強い二オイは、弱い二オイを際立たせるどころか、むしろかき消してしまう。二オイによる自己了解と相互了解は、他者を排除したかなりクローズな関係の中でしか可能とはならない。さらに、人間社会が語感の中で重視して来た視覚や聴覚を排除した関係でないと成り立たないだろう。この二人の時間が昼夜逆転し夕方以降に始まることや、お互いほとんど言葉を交わさない生活である

のは、この関係を示唆している。

さらに、「乳房」「接吻」などといったものに全く興味を示さない太郎との交わりは、みつこの既存の性の在り方を変化させてゆく。顔が赤く腫れ上がり、鼻も丸くなり、唇が乾いてゆく自分の姿を醜いと感じる様になったみつこは、以下の様に思う。

他人にあまり激しく執着されると顔が醜くなっていくのかもしれないとも思い、何しろ太郎は他の人間たちと違って、みつこの顔を採点するような冷たい目で見るのがなく、採点されるなら自信のあったみつこもいきなり腰にしがみついてくる太郎を前にしては顔を修正している暇もなかった。

(107頁)

みつこが、北区の人々から「美人」であるという評価を受けていることは、物語で既に何度も述べられていた。この視覚的な美的評価は、他者からのみならず、みつこ自身にも既に内面化されているものであったのだ。だが、そうした美的評価をも、太郎の前では解体されつつあった。むしろ、そうした美的価値は、最も近代的なものの一つである。

女の美貌の価値は、社交を(そしてそれをともなつた社会を)前提している。さしむかひのついでの間では、容貌の価値は減滅する。誰か第三者が「いよお、お宅の奥さん、べっぴんですなあ」と賞めたたえた時にだけ、その価値は上昇する。ヴェブレンの言つ「暗示的效果」を発揮するには、それを第三者に見せびらかす必要がある。産業社会の中では、こうして女の美貌は、男にとって、限りなく消費財に近いものになった。

「発情装置」⁽³⁾

だが、今まで見た様に、この物語が解体するのは、近代的な価値観のみではない。上野を始め多くの社会学者は、女は美の価値を押しつけられる代わりに労働から阻害されていった近代を指摘するが、みちこは「塾」を閉じることで、自らの労働の基盤を放棄する。さらに、その代替は、男性でもなく大人でもない、小学生の生徒・扶希子である。結婚・家族制度、ヘテロセクシャリズム、五感における視覚・聴覚の重視など、この物語の解体の射程は人間にとつてより根元的なものである。

むろん、構築主義的な立場から見れば、こつした概念も全て絶対的な根拠など持ち得てはいない。しかし、こつした概念が転倒する世界はあまりにも抑圧の奥にあつて、我々の「通常」といった感覚は、その抑圧の上に成り立っている。午後の眠りの中で成り立つ『犬婿入り』という世界は、そうした人々の抑圧が揺籃された世界の中に成り立っているのである。

6

太郎の過去を知る折田夫妻の出現によつて、みつこは、太郎の妻であつた良子と出会う。この既存の夫婦関係を重視する折田夫人の介入が、太郎とみつこのヘテロな物語そのものを解体させる。

その過程にある「ゲームセンター」で「腰を振る」という噂や折田夫人の「ゲイバー」という言葉は、これまでと同様、子供達という伝達者によるノイズと、母親たちによる「解釈」が、この物語を錯綜させつつ豊かにしていることを示している。この有り様は、大塚英志が川田順造からヒントを得た「ポリローグ」という概念が言い当てている。

作者が一人で語る「モノローグ」、受け手と対話しながら語る「ディアローグ」に対して「シンローグ」「ポリローグ」では固有の作者

はもういません。「シンローグ」とは昔話が人々が集まる座の中で、そこにいる一人一人の即興の語りの相互作用の中で昔話が語られる、というものです。しかし「シンローグ」は座に居合わせた互いに顔見知りの人間達が、彼らが共有している昔話を再現するのに対して、「ポリローグ」は、街中や広場において、それぞれが勝手に発話している喧噪状態を言うのです。しかし、その喧噪は無秩序ですが、そこに不定型でゆるやかな一つの物語がやがて生成する可能性もあるのです。

大塚英志 「キャラクターとしての「私」」⁽⁴⁾

この意味において『犬婿入り』を、無秩序から生まれた「不定型でゆるやかな一つの物語」として捉えることは可能であろう。それが均質な都市で消費される物語として発生したものを大塚は、「都市伝説」と定義する。確かに、八〇年代後半から九〇年代は、多くの都市伝説が流行し、またマスメディアなどによつて消費された時期でもあつた。

だが、ここで興味深いのは、大塚が「犬婿入り」の翌年、そのブームを相対化する言説を残していることである。

しかし、いずれにせよ「都市伝説」の内容分析は当分の間、無効であろう。ブームが終わりしばらくの時がすぎればその始まりが自然発生なのかメディアの捏造なのかなど関わりなく、生きのびた「話」のみが再びフォークロアとして語られるはずであり、分析はその時でも遅くはない。むしろ今、論じておかねばならないのは「都市伝説」ブームそのものを支えた「社会心理」であろう。

「都市伝説の死」⁽⁵⁾

もちろん『犬婿入り』とは都市伝説そのものを描いた作品ではないし、そのブームを背景に意識した作品でもないだろう。だが、確実

に言えることは、『犬婿入り』には、その都市伝説が生成されるメカニズムそのものが書き込まれていることなのである。そして、そのメカニズムを支えているのは、新興ニューファミリー層が持つ、「結婚」「家族」「性」の制度が成立する為の抑圧した、あり得た様々な可能性たちであったのではないか。

中はすっかりかたづいていて、なんだか、空気が妙にひんやりしていて、そのうち、折田氏が、あつと声を上げ、指さしたのは、庭から入ってきた場合、すぐに目につくように柱に貼られた貼り紙で、そこにはピンク色のマジックペンで大きく、キタムラ塾は閉鎖されました と書いてあった。(136～137頁)

キタムラ塾は、ピンクのマジックペンで書かれた貼り紙と、「汚さ」の表象により始まり、同じ色のペンによる貼り紙と、「かたづけ」た部屋の表象により幕を閉じる。

翌日、折田家のみつこから電報が届き、そこには、フキコヨツレテヨニゲシマスオゲンキデ、と書かれていた。みつこの住んでいた家は間もなく壊され、そこにはアパートが建つことになり、その工事が始まった頃には、どの子もそれぞれ、新しい塾を見つけて通い始め、南区に足を踏み入れることもほとんどなくなっていた。(137頁)

物語を発動させた南区の塾は消滅し、また物語を伝達する子供達も再び南区に足を踏み入れることはない。物語は、様々な「揺れ」を包摂したまま、あらゆる円環の中に閉じこめられる。届いたことのない「電報」をきっかけにした物語は、確実に届いた「電報」で幕を閉じる。そこに残ったのは文字だけである。短い文字の空白は、我々に言い続けるだろう。「解釈せよ」「そして」「伝えよ」と。

小説の引用は初出に拠ったが、ページ数は、読者の便を考慮し、『犬婿入り』(平成一〇(一九九八)年一〇月・講談社文庫)に拠った。ただし、引用部全てにおいて初出と異同がないことを確認してある。

註

- (1) 岡部隆志 『犬婿入り』論 「國學院雑誌」 平成一六(二〇〇四)年六月
- (2) 多和田葉子 『犬婿入り』について 『カタコトのうわごと』 平成七(一九九五)年五月 青土社 20頁
- (3) 上野千鶴子 『発情装置 エロスのシナリオ』 筑摩書房 98頁
- (4) 大塚英志 『キャラクターとしての私』 『物語消滅論』 角川書店 平成一六(二〇〇四)年十一月 151頁
- (5) 大塚英志 『都市伝説の死』 『戦後民主主義の黄昏』 平成六(一九九四)年七月 PHP研究所